

地学と切手

キプロスの
銅鉱山切手

P. Q.

キプロスの銅鉱床は有史以前からオリエントにおける銅の供給者でありその歴史は恐らく青銅時代にさかのぼるであろう。クレター島におけるクノソスの宮殿の青銅器(B. C. 2,500)にもキプロスの銅が使用されたと信じられており、ホーマーの中にも記されたりまたB. C. 1470年にはエジプトのトトメス4世に108コの純銅塊が船で送られたとの記録がある。実際に英語でいうCopperは近代ラテン語のCuprumからさらにこれは古典ラテン語のcyprium aes“キプロスのメタル”に由来したものだという説が広く行われCODでもそのように記されている。しかしダンネマンは彼の大自然科学中の中でCuprumという名前はおそらくローマ人が北方民族から借用したものだろうと述べており説が多いようである。

キプロス共和国は面積9,251 km²で青森県の面積(9,000 km²)にほぼ等しく人口は64万人(1977)といわれている。住民はギリシア系71%トルコ系28%ほかにアルメニア人によって構成されている。

キプロス島はもとトルコ領であったが1878年にイギリスに割譲し1925年には英国直轄植民地となり第2次大戦中は重要な戦略基地であったが1956年から反英運動が起こり1960年8月に共和国として独立した。公用語はギリシア語とトルコ語である。しかし1963年にトルコ・ギリシア系住民の対立から内戦状態になり1972年にはトルコの進入によってキプロス島北東部は1975年2月トルコ・キプロス国を樹立して今日に到っている。現在の主要産業は果実、ぶどう、オリーブ、綿花、銅、硫化鉄、クロム、観光であるけれど総輸出額の約35%は鉱物資源(銅、硫化鉄、クロム)でその大部は西ヨーロッパに輸出されている。銅鉱山はイギリス系カナダ系の鉱山会社によって開発されている。

キプロスの各地には主に4か所であるがスラグの山が築かれておりその付近の地表地下に古代の建物が埋れている。中には50万トン以上に達するものもいく

つかある。遺物との関連でみるとフェニキア以前のスラグは褐色～赤色を示し鉄にとみマンガンに乏しく銅も多少残っているがローマ時代のスラグは黒色でマンガに富み銅分に乏しい。これはローマ時代に精錬技術が進歩したためといわれる。A. D. 166年にキプロスの採銅精錬について書かれた書物が残っている。ところで青銅器に使用する錫はどこから手に入れたかが問題である。はじめは島の銅と錫で青銅器が作られたが大量の錫はエーゲ海周辺にはなかった。そこでフェニキア人が登場する。フェニキア人は初め錫を知らなかったがスペインに進出した時タルテッソス(ジブラルタルの西)で錫に出会った。錫はより北の方から来ていたが錫の利益があまり大きいのでついにイベリア半島を廻ってイギリスのコーンウォールまで来た。彼等は錫の産地をギリシア人には秘密にしたがギリシア人はまだ見ぬ北の国をカシテリデス(錫の国)と呼びこれが後にイギリスの名前になったという。B. C. 421年のアテナイでの錫の相場は現在の30倍から40倍した。

このように古代に栄えたキプロスの銅鉱業は4世紀のローマの分裂で衰亡した。19世紀にイギリスがこの島を入手したことからふたたび銅鉱業がよみがえり20世紀に入ってから再び隆盛を示すようになった。1960年前後においてはキプロスは銅鉱石の輸出で平均年間で800万ポンド前後を手に入れている。

キプロス島の地質を特徴づけるのは前三疊紀の膨大な塩基性の火成活動であり250ミリガルに達する重力異常である。このためキプロス島についての地質学的位置については議論が絶えない。Troodos Igneous Complexは島の約3分の1を占めその中の枕状溶岩中に鉱床が胚胎している。最近の論説では下部枕状溶岩(ソレイアイトを主にする)の火山作用と熱水性溶液による鉱床の生成——海中での溶脱作用と鉱床の2次富化作用——上部枕状溶岩(橄欖石玄武岩を主にする)によるカバーに示される鉱床生成のコースをたどったという。

切手はギプロス共和国最大の銅鉱山である。Mavrovouni 鉱山の坑道と坑車が示され1955年に発行されたがこれは1960年にギリシア語とトルコ語で加刷されたもの。